

研究所たより 研究所たより

この4月から保育所の父母会長と併せて、私の住む街の自治会の役員になりました。聞くところによると東京のベッドタウンとして30数年前に開発され、区画整理された割と余裕のある敷地に一戸建ての持ち家が並ぶ、戸数が630ほどある自治会です。10～25戸を1ブロックとして40ブロック。それぞれに毎年ブロック長を選出して、それとは別に地域の1～3ブロックごとに役員を1人選出する仕組みになっています。私が住んでいるのはこの街には数少ない借家で、本来は自治会活動に参加することもないのですが、それでも引っ越して7年ほどになり、近所の人たちと顔見知りになる中で役員の順番が回ってきたのでした（ブロック長も数年前にやりました）。当然、30人ほどの役員の中で30代は私一人、多くは60代以上と見受けられる方々です。

自治会の名前は「ニュータウン」といって（は開発した業者の名前）、地域と関係のない名詞に30年以上経った“ニュータウン”ですから、毎年自治会の総会では「名前を変えた方がいいのでは？」という意見が出ますが、今さら変えるわけにもいかないようです。私が越して来てまず思ったのは「子供がいない」ということでした。私の家の隣近所も、ほとんど子供が成人して家を出て行った夫婦の世帯ばかりで、4年前に長女が生まれたときには、皆とてもかわいがってくれました。

そんなわけで自治会の活動には、夏祭りや年末の餅つきに顔を出さず程度で、それも

たまたま自治会館から徒歩30秒の位置に住んでいるから行っているくらいで、その他の行事には一切参加したことがありませんでした。ところが今年は役員なので、毎月役員会があり行事の準備にも積極的に関わらなければなりません。さっそく7月の末には夏祭りがありました。

夏祭りは昼から行う子供神輿と夕方からの盆踊りの2部に分かれています。準備はおよそ3日前位から行われ、自治会館の前の広場に盆踊りのやぐらを組みます。当日は提灯の飾り付けや出店の準備、テントの設営など午前中から役員総出で働きます。私は子供神輿に随行してハッピー姿で2時間町内を練り歩き（暑かった！）、夕方からは生ビール販売係を他の役員さんと一緒に行いました。盆踊りは、毎年恒例の抽選会（会の最後に行く）の効果もあり、沢山の人が参加していました。また今年は新趣向ということで、東京音頭などに加えて「マツケンサンバ」を導入し、婦人会の方々がパワフルに踊るのにつられて、多くの子供や大人がやぐらの周りで体を動かしていました。

さて、自治会の仕事をしてみても思ったことを挙げてみます。

1 これは大変な仕事だ！

夏祭りの準備に3日もかけ、終了後の日曜も後片付けに出てくるという物理的な大変さもさることながら、地域の住民と行政をつなぐ窓口になったり、防犯や防災の取り組みをしたり、まさに地域自治の

担い手で、ここが機能しなくなったら大変なことがいろいろ起こりそう。

- 2 30年以上これを続けてきた人たちには頭が下がる

役員の一部や婦人会の人たちは“ニュータウン”ができてから毎年この仕事を担ってきたそうで、手伝いに参加した子供会の父母(私と同年代)に、ある役員が「お前の親父はこれを20年以上やってきたんだよ」と言っていた。「高齢化した街」という漠然としたイメージを持っていたが、地域のために無償で働く人たちの活動があって街が成り立っていることを実感。

- 3 次の世代に引き継げるの？

しかし、今の自治会役員構成をみても60代以上の人がばかりで、次の世代にどう引き継ぐのだろう。“ニュータウン”第一世代は自分たちの街をつくろうと一生懸命だったと思うが、第二世代の多くは街を出て行ってしまった(多くのニュータウンがそうなっている)。地元に残っている若手も親世代が元気なうちは自治会活動には出てこない。

- 4 これからの自治会は何を核にするか？

子供神輿は地元の神社から分社した御神体だそうだ。夏祭りの前には神主が来てお払いをする。多分、ほとんどの人は宗教行事とっていないだろうが、何か違和感がある。結局、高度成長のさなかに日本中のさまざまな地域から集まった人たちが“ニュータウン”で新しいコミュニティをつくろうとした時に、中心に置いたのが神社だったのか？と。でも、このとても日本的な街のあり方は今後通用するだろうか？しないとしたら、それに代わるものは？

協同総研の会員の方々でも自治会活動をずっと担ってきている方がいると思います。2002年に千葉で行った協同集会の準備過程で、ある自治体の職員から、千葉県では堂本知事就任以降「NPO立県」の掛け声の下、機能しなくなっている自治会や町内会への予算配分を減らして、NPOの育成やNPOに街づくりを担わせる方向で予算を増やしている、という話をお聞きしました。現在の「官から民へ」路線の中でも、NPOに期待する向きも大きいように思います。しかし、本当に「街づくり」ということを考えたときには、自治会や町内会といった地域の問題に包括的に関わってきた中間団体をどうしていくかをまじめに考えなければならないように思います。

今や日本中どこに行っても外国人が普通に暮らしている姿が見られます。また、障害を持つ人たちの社会参加も叫ばれています。共働き世帯やシングルマザーはどんどん増加しています。庭付き一戸建てに住むサラリーマンと専業主婦の世帯を中心とした街づくりから発想を変えなければならない時に来ているように思います。

菊地 謙